

---

# 魔法少女真剣かる武士娘

俺はいつでもOTL

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女真剣かる武士娘

### 【Nコード】

N2784P

### 【作者名】

俺はいつでもOTL

### 【あらすじ】

侍少女と魔法少女の合体！ここに来る！！

ユートピアの事件を止めて早二か月。

あのファミリィは、フードの男によって異世界へ飛ばされる。

その世界は…魔法使いの世界だった…

## 第0幕、風間ファミリーとフードの男（前書き）

どうもです。自分は文才ありませんが、見てくれたら幸せです。  
なお、自分は別の主文の方があるのでこっちの更新は遅いです。

## 第0幕、風間ファミリーとフードの男

ある所に、10人と一体のグループが遊んでいた。

岳人「ふー2ヶ月前にあったことが嘘みてーだぜ」

卓也「けど、現実なんだよね」

がたいのいい少年、島津岳人と肌が白い少年、師岡卓也が河原を歩  
きながら言う。

2ヶ月ほど前、葵冬馬が仲間の井上準、榊原小雪と板垣一家、釈迦  
堂刑部が合法麻薬「ユートピア」を使い全国の不良たちを暴徒にし  
てここ、川神市を恐怖のどん底に陥れようとしていた。

それをかれら風間ファミリーたちがくい止め、皆それぞれ罪を償う  
ため日々頑張っている。

大和「それにしても、あいつらはこれかから先どうなるんだろうな」

由紀江「ちよつとだけ、心配ですね」

松風「ねー、しんぱいだねー」

このグループで一番頭がいい少年、直江大和と、刀を持ちこの中で  
一番年下の少女、黛由紀江と由紀江の自称付喪神である携帯ストラ  
ップの松風が葵たちを心配して言う。

忠勝「大丈夫だろあいつらなら」

翔「そうだぜ！俺はあいつらがまた戻ってくる姿が目に見えるぜ」  
最近このグループに入った少年、源忠勝と、バンダナをつけこのグループのリーダーの少年、風間翔一が言う。

京「うん。そうだね…愛してるよ」

大和「ああ。お友達で」

とショートカットでちよつと？変態な少女、椎名京が大和に突如告白し、速攻でふられた。

クリス「こんな時でも告白なんだな」

百代「いつものことだがな…それより、私は早く次の強敵と戦いたい」

金髪の少女クリスこと、クリスティアーネ・フリードリヒが諦めた感じで言い、このグループで一番年上の少女川神百代は戦いに少し飢えていた。

クッキー「あ、橋に誰がいる！」

一子「お姉様の挑戦者かな」

一体のお世話ロボットクッキーと、努力家で百代の義理の妹の少女、川神一子が言う

百代「よし」

と、百代は手をばきばきしながら向かう。

そして橋に付くと仁王立ちをして、フードをかぶった男が声を出す。

フードの男「お前が、川神百代か？」

百代「いかにも（こいつできる！）」

百代はすぐに眼の前の男が強いとわかり、構えていないが臨戦態勢をとる。

フードの男「そうか……なら、少し試そう」

そう言うといきなり消えたかと思うと百代の後ろに回り込み回し蹴りを入れた。

百代「ぐっ（直撃を受けるとは…やはり強い！）」

大和「今日の相手は強いな」

卓也「うん。モモ先輩がいきなり先制攻撃喰らっても動じなかったことはあったけど……」

と、見ている9人と1体は全員あまり心配していなかった。が、

一子「けど、あいつ……」

クリス「ああ。なにか嫌なものを感じるな」

京「うん」

由紀江「ええ」

だが武士娘は心配してはいないが男の気味の悪さを感じていた。

卓也「え、そうなの？」

大和「俺達には分からんが……まあ、姉さんが勝つだろう」

そう言っていると今度は百代が反撃に出た

百代「川神流、無双正拳突き！」

渾身の一撃が繰り出される。

フードの男「ぐおおー!!」

フードの男はそれをなんとか両腕を使い防ぐ。

百代「今の防ぐとは……ふふふ、楽しいぞー!!」

相手の強さがさらにわかり、百代は興奮する。

フードの男「ち、ここまで強いとは」

男はそんな愚痴をこぼしたと同時に

百代「なんだあれは？氣？」

男の手に何かが集約されていく。それを百代は氣だと思ったがすぐに違うとも理解した。

フードの男「はあああああうりゃー！！！！」

赤い一筋の閃光が男の手から発射される。

百代「かーわーかーみー……波ー！！！！」

百代も負けじとコロニーレーザーと言ってもいい氣の塊となった一筋の閃光を発射する

光と光はぶつかり合い、だがいを相殺した。

この時世界で異常なエネルギー反応が出たそうだが学者たちは理由を知ると「なんだMOMYOか」で済んだらしい。

翔一「うわー今日の相手はモモ先輩レベルの相手みたいだな」

翔一は二か月ぶりの百代の本気を見て少し驚いていた。

大和「けど、ああいう強いやつがいるなら噂くらいは立つもんだろ？」

一子「うん……でも顔が見えないし……」



大和はそのことを武道家マニアの一子に聞くがわからないという。

由紀江「!!!次で決まりそうですよ」

由紀江がそう言つと皆見いる。

百代「お前、何者だ？」

百代は久々の強敵の名を聞く。

フードの男「……やはり、おもしろい」

百代「答える気なしか？」

百代は最強の一撃を入れる体制に入る。

フードの男「1つ聞く……お前もつと戦いたいか？」

百代「ああ。だが獣になる気はないぞ」

フードの男「そうか」

男は足蹴りをしようとしているのか構える。

百代（来るな。なら……はらってカウンターだな）

百代はそう考えるが男がしてきたのはまったく別物だった。男は懐から変わった宝石を出した。

フードの男「いくぞ、秘儀…」

宝石が光り出す

百代（なんだ？）

フードの男「次元斬り蹴り！！」

男は百代から離れているにもかかわらずけりを放つ。それも空に向かって

百代（何を…って！）

そこには空には穴が開いていた。

卓也「ちよつとなにあれ、これ何のマンガ!？」

あり得ない状況に卓也のツッコミが入る。

岳人「まあ。モモ先輩レベルなら、アリじゃね?」

とちよつと疑問形で岳人が言う。

忠勝「つか、なんか俺らの体、浮いてねーか」

と、忠勝に言われて皆足元を見る

大和「ってほんとだ！」

さすがの大和も驚く。

翔一「ははは、おもしれー」

卓也「こんな時に何言ってるのさキャップ！」

この状況を楽しんでるキャップこと、翔一に卓也が意外と冷静にツコム。

岳人「うお、これなら女子連中のパンツも…」

クリス「狼藉者が！！！！！」

岳人の変態行為が行われる前にクリスの蹴りで気絶し、女子グループは全員スカートガードした。

京「大和だけに見えるよう修正！」

ただ1人、変態みやこを除いて。

忠勝「おい、あの穴に近づいていくぞ」

忠勝は穴に指さして言う

大和「なにがおこってたあああああああああ」

大和の叫びと共に皆穴に吸い込まれた。

フードの男「む、彼らはどうでもよかつのだが……まあ、しかたない。というより、」

男は百代を見る。

百代「……………」

平然と立っている百代を

百代「で、あいつらどこにやった？」

だがその眼は怒りに染まった眼をしている。

フードの男「ふっ、なら、行けばいいだろ」

男がそう言って跳び、穴の中へ入って行った。

百代「上等だ！待ってる今行くぞ……美少女が……！」

と最後は関係あるのかとツツコミが入りそうなことを言いながら百代も穴に入っていった。

それと同時に、穴は閉じられた。

## 第0幕、風間ファミリーとフードの男（後書き）

京はあの事件の時のあれは百代もいたということ、既成事実にしていないという設定にしています。その方が面白いので。

感想よろです。

## 第1幕、武士娘、けんざん！！

むにゅ

なんだ、何か柔らかいものが顔に……って考えるまでもないな

京「うううん」

声が聞こえた。やはり京か。

しかしこれはこれでいい気持なのでしばらく放置。

京「うううんおきない。仕方ない人工呼吸を」

大和「する必要ないから」

キスされる前に手でガード。あの時色々あったが、あれは姉さんも加わっていたということ。既成事実にはなっていない。そう言うところは京は律義なのだ

京「目覚めたみたいだねあなた」

大和「ああ、別れよう。もうおしまいだ。それにしてもここはどこだ？」

速攻で返す。すると、しくしくと京は嘘泣きをしている。まあ、いつものことだ。

由紀江「あ、大和さんが目覚めました」

まゆつちが近くに来て後ろに向かって言う。

忠和「お、ようやくか」

翔一「大和びりけつー」

ゲンさん言ったあとキャップがからかったように言う。

大和「心配してくれたんだね。ありがとゲンさん」

忠勝「勘違いすんじゃないかねえ、このまま寝てて風邪ひいてうつされてもたまらないからな」

ゲンさんは仲間になってもいつも通りだった。

大和「全員いるのか？」

翔一「ああ、モモ先輩もクッキーもな」

と言われて周りを見ると確かに全員いるが

大和「あれ、クッキーもいたんだ」

クッキー「いて悪いのかよ、お前お仕置きするぞー!」

と言うとどうやって変形したのかもものすごいスマートになってビームサーベルもった第2形態となった。

クッキー2「あまりなめたことは言わない方がいいぞ」

ついでに声まで変わってる。

大和「わかったから変形するな」

まあ、これもいつものこととして……

大和「それで、結局ここはどこなんだ？」

岳人「壁に耳を着けてみる」

岳人に言われて壁に耳を着けようとする。

京「私の胸にならいつでも？」

大和「（無視）！この音、これ列車か!？」

一体どうなってる？確か、俺達は姉さんとあの男の対決を見て、それで…

大和「姉さんは、何か知ってるなら教えて」

百代「お前は今、私のスリーサイズを知りたがっている」

一子「変態よー、変態がいるわー」

なんということだ、無実の罪を着せられた

クリス「この狼藉者が!！」



大和「まあまあ、落ち着け。…で、どうなの姉さん？」

百代「ふむ、そうだな」

姉さんは最後にあの男の出した穴の中に入り、気付いたらここにいて、俺達を一人ずつ起こしたらしい。

大和「わからんな〜モロ、何か情報は？」

卓也「う〜んさつきから調べようとしたんだけど、携帯は圏外だし、ネットも開けないんだ」

これじゃ、どうしようもないな。最悪、姉さんに壁を壊してもらおうとしてもそこからどうするか……

なんて考えていると

百代「！お前ら、少し下がってる」

姉さんがいきなり言う。

由紀江「なにかいます」

今度はまゆつちが刀を構えて言う。すると……少なくともクッキーよりはできの悪そうなるっばいロボットがいきなり現れて襲いかかってきた。

卓也「なにこいつら！」

大和「お前ら、ひと塊になれ」

クリス&一子「わかった(わ)！」

俺の指示で全員がひと塊になる。

大和「姉さん、任せた」

百代「招致してる」

由紀江「私も、お手伝いします」

まゆっちも前が出る。決まったなこれとは思っている

ズド

ン

いきなり天井が壊れて人が落ちてきてそのままロボットを粉碎した。手にガントレットのような物を付けてるようだがそれでもよくあんなのを破壊できるもんだ。

？「あれ？なんで民間人が!？」

いや、驚きたいのはこっちの方なんだけど…っていうか、結構美人だから…

百代「世界中のかわいい女の子はすべてからく私の物」

？「え、えええ!!！」

百代「かわゆい(抱きしめ)」

さっそく姉さんの癖が発動した。

？「えと、あの、えええと・・・」

いきなりこんなことされると驚くのが普通だ。

？「スバル、ちょっとどうし・・・」

百代「美少女そのにはっけーーーーん！（抱きしめ）」

その後オレンジ髪のツインテールの女の子が入ってきたがすぐに姉さんに捕まる。

？「ほ、ほえ！！」

2人ともいきなりのことで驚いているようだ。

岳人「おい！見るよ大和にモロ！あの3人が集まったことで、胸がものすごく強調されてんぞ！！」

大和「この状況でそんなことに目が行くおまえは凄いや」

しかしこれはこれでいいな

京「ジー」

京が俺を見る。いや粘っこい目で見ている。

大和「えと、京さん？」

京「大和は私の胸見たらいいよ。見せてあげてもいいよこの場で」

大和「嬉しいけど却下で」

京「ちえ」

と話しているとゲンさんが話してくる

忠勝「おい、あいつらに色々聞いた方がいいんじゃないか？」

大和「おっとそうだった。姉さん、その辺で」

百代「ん〜おまえもしてほしいのか〜」

大和「嬉しいけどそれは後。ともかくその2人に色々聞かないと」

俺が言うのと姉さんは渋々彼女たちを解放した。

大和「すみません色々」

?「いえ、いいですけど…」

オレンジ髪の子はそう答える。ってこの子の手に乗ってるのって!

大和「えーと、それって銃? イッツ、ガン?」

?「え、あ、はい。一応」

と答えた後。

大和「モロ警察呼んで」

卓也「だから使えないって」

?「つて、なんでですか!」

何でと言われても……

由紀江「!皆さん!伏せて!……はあ!」

まゆっちはそう言つと一気に走り、俺達の近くに来ていたロボを切り裂いた。

?「す、すごい」

ショートカットで水色の髪の子はそう言つ。

?「と、ともかく連絡しなきゃ」

そうは言つが連絡するそぶりは見せていない

大和「あの」

?「すみません!詳しい話は後にして、今は協力してください!」

いや、そう言われましても

翔「いいぜ!」

つて

大和「いいのかよキャップ!？」

翔「いいも、悪いも、この状況はそれしかねーだろ」

まあ、確かに

大和「けど、一応のことも考えて、動くのは姉さんだけだからな」

翔「え〜やーだ、やーだ!」

卓也「こんな時でも、キャップはいつも通りだから和むな」

岳人「たんなる子供って感じがするけどな」

大和「無茶言うな。相手のことがわからねーんだから」

言い聞かせるとどうにか「ぶーぶー」言いながらも停止した。すると

ズカ

ン!!

卓也「うおお!何今度は!？」

クリス「先ほどからこんな感じだはずっ」と

一子「ほんとにゴゴゴ」



紙一重でよけるとそこから先は高速のスピードだった。高速のスピードのまま、拳を当てる

数十センチ凹み、爆散した。

百代「あまりにも弱すぎる……クッキーや一子達の方がまだ強いぞ」

キャラ&エリオ「……………」 啞然としている

自分たちがあれだけ苦戦していたガジェット？型をあっという間に、それもこの世界にある＜魔法＞と呼ばれるものを使わず純粹な拳だけで粉碎した百代を見て2人は少しの間ボーっとする。

百代「んー上にもいるな……！！」

そのとき、百代の心臓を射止めた美女が空にいた。

その2人の美女はさきほど百代が潰したガジェットの戦闘機の形をした？型と戦っている。それもかなりの数だ

百代「むむむ、どうにかしてあそこにけないだろうか。さすがに高いし遠い」

それでも行こうと思えば行けるのだが、雑魚相手にそこまでするのは百代は嫌なのである。

キャラ「あ、あの、私でよろしければ、なんとかしますけど……」

百代「??？」



そんでもって上空

そこで戦っている1人は栗色の髪をしており、服はどこか魔法使いみたいな白い服。そして先端に赤い宝石を着けた杖を握り、そこから魔法を繰り出す、高町なのは

もう1人は、きらめくようなロングの金髪。黒衣装と、黒い鎌を持つっており、雷のごとくのスピードで相手を切り裂く、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン。

なのは「え、民間人が？」

戦闘中について先ほど風間ファミリーを見つけたスバルとティアナと言う少女達から「念話」と呼ばれる魔法を使い、直接声が頭に響いてくる。

スバル（はい。全員で10人と……1体のロボが）

なのは&フェイト「はい？」

ロボと言う言葉に少しだけ戸惑うがすぐに持ち直そうとするが

スバル（それと……言いにくいことなんですけど……1人がどこかに言ってしまった）

なのは「……ちよ、その人は今どこにいるか分かる」

さすがに焦り出すが

スバル（それが、いまキャロとエリオと一緒に…）

百代「はーははははははは。楽しいiiiiiiiiiiiiぞおおおお  
おおおおお！！！」

そんな豪快な女性の声を聞いて振り向くとそこには白い大きな竜、  
フリード・リヒに仁王立ちで乗った百代だった。

百代「その美人のお二人、……あとでデートしないか？」

フエイト「は、はい？」

？いきなりのこと過ぎて訳がわからない2人  
なのは「ふ、ふえええ？」

百代「まあ、それはあそこにある雑魚供を片づけてからだなっ！！」

フリードから大きく跳躍して飛ぶ。そしてガジェット達の中心にきて

百代「川神流、大爆発！！」

自爆した。その爆発に巻き込まれ、ガジェットは全機消滅した。

技を使った当本人の百代は、

百代「ふー、汚い花火だったな」

どういう原理か、無傷で、しかも宙に浮いたまま寝転がっていた。

それを見ていた人物達その1、風間ファミリーとスバル&ティアナ  
翔一「うひょう！またスーゲーでかい花火だったな」

忠勝「なんつーか、もうなんとなく納得して、なおかつ驚かない俺  
らが変わりたいだぜ」

大和「……それには俺も同意」

大和が言うると他のメンバーもうなずく。

スバル「……かつこいい」

ティアナ「いや、そう言う問題じゃないでしょ！なな、なんなのよ  
あれ!？」

こちらの2人は一般常識的に驚いている者と、なんか一子なみに百  
代を尊敬の眼差しで見ている者だった。

それを見ていた人物達その2、機動六課の司令室

？「が、ガジェット、全機全滅です」

眼鏡をかけたオペレーターことロングアーチの1人、シャリオ・フ  
イニーノことシャーリーが呆然と、そしてゆっくりと事実を述べる  
？「な、なんて言ったらええんか、言葉がみつからん」

そしてこの機動六課の部隊長、八神はやてもこの状況を、今だに信じ切れていなかった。

はやて「と、ともかく、民間人の保護。それと、あとで彼らに事情聴取や」

シャーリー「りよ、了解」

訳がわからないまま事態は進んでいた。

それを見ていた人物達その3　なのは、フェイト、エリオ、キャロ

なのは「あれって、なに？」

フェイト「え、えーと、なんだろうね」

・  
・  
・

なのは&フェイト「あははははは、あははははは、あははははは、あははははは」

エリオ&キャロ「しっかりしてください！なのはさん！フェイトさん！」

ギリで正気を保てていない2人を抑える2人がいた。

それを見ていた人物達その4　とある所にある謎の研究施設にて

？「……………」

?《……………》

どこか医者か科学者を思わせるような白衣を着た男と、胸に?と言う数字がついた薄紫色のロングの女性はその光景を啞然と見ていた。

そもそもこの男は並大抵のことでは全く動じないような男である。それがここまで黙らせるとはつまりそれほどのことだったということだ。

?「ふ、ふふふ、ふははははははは。なんと面白い!!彼女こそ、私の研究に最も必要な人材だ!!」<sup>パッ</sup>

?《ふう、いつも以上におかしく笑いますねドクター。あんなもの見たというのに》

ドクターと言われるその男は続ける

?「それはそうだよ!今まで見たことない圧倒的な力!だから魅了されるのさ!」

それを聞いた?の女性は《やれやれ》と溜息をつくだけだった。

それを見ていた人物達その5 フードの男

男はずっと退屈だった。様々な人を見たが、どいつもこいつもつまらない相手だった

フードの男「ようやく見付けた」

心底嬉しそうにそう言う。

フードの男「さて、しばらくしたら、会いに行くか」

暗闇へと消える。後には、何も無い

新たな戦いが始まる。それが何か、彼らはまだ知らない。

だが悪と言うなら力を合わせて戦う。それが武士である

そして、いまここに、武士と魔法使いが、最初で最後に共に戦うこととなる……………

魔法少女真剣<sup>マジ</sup>かる武士娘、いざ、出陣

**第1幕、武士娘、けんざん!! (後書き)**

次回の投稿は結構時間がかかります

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2784p/>

---

魔法少女真剣かる武士娘

2010年12月3日13時17分発行